

「氾濫」を通過点としたポストモダン文学の 考察・感想文

多谷昇太

「文学評論」ということには常々関心を持っていましたがそれは評論家たちが其々の説を論じて、偶々私がそれを目にした時に推考する程度のもので、やれ今がポストモダンの時代だとか、ここにお書きのゼロ世代云々などということに関しては至って門外漢でした。もちろん文学評論がひとつのカルチャーとして文学の世界に君臨していたことは知っています。自作品のことで恐縮ですが例えばこの「みなせ」とは方々の「あおむしさん」に掲載させていただいている拙著「一葉恋慕・明治編」に於いては、この先どうしても文学の系譜についてひとくさり綴らざるを得ず、自然主義↓写実主義↓象徴主義ORロマン主義という西洋の系譜を、また一葉の往時で云えば江戸時代の偽作文学から坪内逍遙の「小説神髓」を得て写実・ロマン主義へと近代文学に至る様を、一葉とその取り巻きの人物たちに語らせねばなりません。ですから私に於いてはこのような時

に文学論を再認識する程度のレベルでしかないわけで、仰るような文学評論というジャンルを知ってはいても、そこに些かでも蘊蓄があるわけではありません。それゆえ伊藤氏の今回の考察などを拝見してはその都度勉強させていただくような塩梅でして、これについて論評云々などは烏滸がましい限りです。ただ何点か心に掛かることがあります。例えばスクールカースト制度。文字通り、スクールカースト制度という文学のジャンルがあるということが驚きでした。「小説家になろう」など投稿ネット小説サイトには私も日頃から投稿・掲載させてもらっています。ここに於ける若い人たちの作品を見れば「いじめ」が蔓延していることが一目瞭然です。他にも「ワープ」「転生」「異次元」などというジャンルがあり、今の若い人たちにとって「あの世がある」ことや「霊の存在」などは当たり前であることが容易に判ります。むしろ（つまらない？）現実世界よりはそちらの世界に重きを置いている観さえあります。私などスクールカースト制度ともども否定的観点からこれらを捉えざるを得ませんが、何で

あるにせよ、これが若い人たちに於ける昨今のトレンドであることに疑う余地はありません。そこに於てではこのような現実乖離の傾向とスクールカーストに走る子供たちの実態やその生起理由については、これに付いては明大教授の内藤朝男という方がその著書「いじめの構造」の中で実によく分析していて、伊藤氏が「タバコ云々」で描いたところの子供たちの倫理観消失や、無法の様のその生起理由さえもがよく判ります（推奨、ご一読）。それ加うるに私観ですが「大人社会が子供の世界に凝縮されて投影される」という一説から鑑みて、また一定期間を強制的に閉鎖空間に寄せ集められて過ごさざるを得ないという、謂わば逃げ場の無い子供たちの状況から鑑みて、オーバーかも知れませんが子供たちは「生存する為に、このカースト制を受け入れる他ないのだらうとも思えるのです。その論旨は、69年間のつまらない私の人生経験から見えてですが、この社会における法律や規範などというものはこれらは謂わば建前であって、公平無私なものですらなく、その建前とは別個の、権力と云うか力と云うか、社

会を実効支配する者達の意向と規範こそが、実は隠れた実効的法律のようになっていていると思えるのです。昨今の森友・加計疑惑を雲散させてしまうような官邸の力、NHKへの郵政の横槍や上野政務官への批判無視等、また海外で云えば彼のトランプや中国の習近平、あるいはロシア・プーチンらの力の外交（内政も！）など、その現れを挙げれば切りがありません。卑近な例で恐縮ですが私の拙著「引越し顛末記」にあるような家主と不動産会社（及びヤクザ親分）などの恣意と強要もやはりそうです。その他にもパワハラやセクハラがあり、何よりも格差社会の現れとその有り様自体が、この社会の実態というものが何であるかを現しているでしょう。これらを糾弾しようが擲諭しようが、あるいは正式に警察や当該機関に訴え出ようが、権力層や格差社会の上の連中はビクともしません。シニカルに鼻を鳴らすのがせいぜいです（尤も今こうして文芸誌に私が記しているように表現の自由があるだけでもマシというものですが…）。

で、スクールカーストに戻りますが、例えばイジ

です。

さて、元よりこのライターたちが文学論や文学の系譜というものを理解意識して書いているとは到底思えません。他ならぬこの私も含めて殆どがそんなことは露も考えずに、およそディレクタント的指向以て書いていることでしょう。であるならば伊藤氏の云う2000年頃から小説への熱意を失ったことや、「純文学の本質は…自己のあるべき姿にこだわり…自分は何をしているのか、それで良いのか？を問うものでなければならぬ」という我々への謂わば諫めもむべなるかなと思ふ次第です。紙媒体からIT化し、活字より映像を好むような若者たちが仰るような消費社会のメイン層であるならば、必然的に文学の傾向もそれをターゲットとし追うようなものにならざるを得ないわけです。すればこの皮相軽薄なるもの(？)文学評論で何とか位置付けし語ること自体が、辟易とさせられるものなのかも知れません。文学は退化し幼稚化しその系譜も断ち切られた…とさえ映ることでしょう。語法や文体に於いても況やをやで、彼の上田秋成でさえその流麗華麗

メを受けてそれを先生に訴えたとしても良くて聞いてはくれましようが(あるいは無視される?)、十中八九イジメをしている生徒らへの効果的な指導は為されず(そのゆえは前記内藤朝雄の「いじめの構造」をご参照ください)、却って「云いつけたな…」とばかりイジメがエスカレートしてしまいうわけです。謂わば正義も規範も通じない、カースト上位の恣意と意向のみを基盤とした無法社会、その空間であるということ、これを大人社会で云うなら「当該機関に訴え出ても一切相手にすらしてもらえない」という現実となるわけです。先の「大人社会が子供の世界に凝縮されて投影される」がゆえのイジメ湧現なのであり、にも拘わらず就学の一定期間を此処で過ごさなければならぬのならば、ここに於けるカースト下位に置かれた子の悲惨さたるや…想像がつくというものです。このようにシリアス極まる体験を経ての、昨今の青年ライターたちによるトレンドなのではないでしょうか。異世界への逃避、その逆の異世界からこの世への介入、その二面に於ける現実社会への批判とリベンジ的指向になるわけ

なる美文に嫉妬したという紫式部や、近くはその語彙の豊富さや文語口語体ともどもインテリジェントを極めた芥川龍之介などと比べれば、抑々比較にさえならないわけです。畢竟過去綿々と続いた文学の系譜は今時を以ってミッシングリングとなり断ち切られざるを得ないのでしょうか？文学評論のジャンルは費えるのか…なのですが、ここにおいて伊藤氏の云う社会評論と文学評論の関係について思いを馳せる次第です。文学を評論するにあるいは文学を為す上において社会（評論）と文学（評論）は車の両輪のようなもので、互いが互いを単にイメージ化する程度の関係であるとはとても思えません。抑々純文学とは日本独特の呼び名だそうで「大衆性」に対する「芸術性」的なものなのだそうです。然るにその系統の雄たる「文藝」「群像」「文学界」は発行がふるわず、方々の「すばる」や「野生時代」などが優勢なのだとか。またそれに止まらず今や敢て両者を分ける必要すらもなく、後者の媒体の中に前者も含まれるようになった、とも云われているようです。私などは前記した偽作文学と近代文学の別離辺

りに所謂純文学と称するものの萌芽があるようにも思えます。どういうことか。伊藤氏の西洋哲学云々とも重なるのですがこの頃に成された哲学的な自己への把握、分析、いわゆる理性や知性、感情、意志とはなんぞや、畢竟我とは、人間とは何なのかと改めて追及する、そう意識することを始めた辺りに純文学と称するものの萌芽を見るわけです。この「自己の発見」とでも云うべき思考法は横文字で云えばインナートリップとでもなり、自己の中にある小宇宙への旅立ちなのではないでしょうか。改めて向かい合うならばそこは未だ謎に充ちた神秘の世界なのであり、真剣に追及するならば宗教の世界にまで誘われるものなのかも知れません。その深度によって純文学の良し悪しさえも決まることでしょう。

ところで、ここに於て奇しくも前記の幼稚なる（？）スクールカーストや異次元指向の昨今若年層イターたちのトレンドと、純文学は重なりはしないでしょうか？もちろん両者の作品の技巧面や高尚・低俗の違いは無視しての話ですが。もし互いの指向性に於て一致するものがあるならば、はたして文学

の系譜は断ち切られたとは云えなくなるのかも知れませんが。些か脱線しますが有史以来過去様々な文明と国家群がその盛衰興亡を繰り返して来ました。ここで問いたいのは果してその過程に於ては何の必然性や連続性もなく、唯の偶然や力関係だけでその歴史絵巻が繰り広げられて来たのかということです。

専制↓中世↓共和制↓民主制（あるいは共産制）という社会の進歩があり、それに平行するように文学の内面における進歩がありました。すればそこには必ず何かの必然性と連続性を見ざるを得ず（これを称して社会と文学の両輪とするわけです）、あたかも「歴史（もしくは時代）の目」とでも云うべき何者かの意志さえも感じられることです。この両輪のうち方々の「社会」を人間多数、人々におけるそれぞれとの関わりと見、方々の「文学」を人間一個の深まりと見るならば、近年漸々にして両者における統一的な模索が始まったとも見れる次第。そこに於ける媒体は？と問うにそれが前記の若者トレンドの異次元指向なのではないでしょうか。換言すれば「魂」を媒体として…と云えるのかも知れませんが。

実は私、この間からツイッターを始めたのですがそこに実に興味深いツイートを一つ発見しました。そのまま引用すれば「俺一人が、俺一人だけが人間やねん、廻りの世界は皆ウソやねん」というもの。

これは何かというに臨死体験をしたある青年のその折りの感想でして、こう表現するしか他に彼には方法がない…とのことらしい。察するにこれこそが魂の感覚であり、それは肉体の死とともに蘇るものですから、臨死体験ということで畢竟彼はそこに一度足を踏み入れたのでしょう。米国の著名な臨床心理学者であるキューブラー・ロスの著作を読めばそこには別な臨死体験者の言葉があります。こちらは遺憾ながらうる覚えなのですが「大事だったこの世のこと（たぶん金とか生前の諸般の事情とか）など消し飛んでしまい、今のこの感覚こそがすべて」というもの。そしてその臨死体験者は蘇生後、強烈だったその感覚こそを第一義として生きるものですから、廻りの人間たちから見れば（いい方に、あるいは何か別のものに）「変わった」となるそうです。この両者を拙い私の語彙で表現するなら、前者は真我に

立ち返って見た取るに足らない廻りの偽我なのであり、後者はその真我の働き（すなわち愛、もしくは慈愛、他者とのあるべき真の関わり）にまで立ち返った姿と云えるのかも知れません。

ところで文学の系譜の一段階で象徴派という一派がありました。その代表的な詩人であるA・ランボアの言葉で「（象徴派とは）魂から魂へ、全てを要約し、薫り、音、色彩、思考を引つ掛け引き出す思考」というものがあり、彼の「酔いどれ船」や「四行詩」などを見れば些かなりともその説明に「引つ掛かる、ものがあるのではありませんか？病的なままでに研ぎ澄まされた彼の魂への指向と憧れが、それを為さしめたのでしょうか、先の両論で云えば如何せん彼の詩は未だ片輪でしかなかった。「来ないものか、来ないものか、魂がただひとすじに打ち込める恍惚のその時は…」と痛切に求めた、魂への感覚的な肉迫には鬼気迫るものがあつて、その意味では人間一人の深まりを誘う文学における一つの（感覚に於いての）頂点を極めたと云えるでしょう。なぜ斯くも彼が魂と表現せざるを得ないものを求めた

のか…そこには世の中への疑問と反発（抗い）があったのだと思います。世の施政者や既得利権者達や（神を）商売とするような聖職者らに、引いてはそれらの存在を許しているような神そのものにさえ彼は反発しました。それでいながらではそれらを贖うものを、嘘のないものを彼は抛りどころにしたかったのです。一時起こったパリ・コンミュンに彼は（恐らく勇んで）駆けつけたことでしょう。ですが史実に残るようにその場における混乱と、彼が嫌った市井における自我丸出しの人々の醜さを、ここでも同様に見てしまった…のかも知れません。この人の世の醜さと、虚飾を嫌う青年の一途さは後の世の若者たち伝播され、彼ランボォは謂わば「青春の神」とでもいう存在になつて今もあるようです。

さてここに於て件のスクールカーストジャンルの青年ライターたちですが、彼ランボォとどこか似ていませんか？（たぶん）彼の在世時よりはるかにシビアな、日々の学校生活で体験し続ける地獄のような苛みに晒されつつ…のことですから、それへの反発や、あるいはそこからの逃避とそれに代わる（謂

わば)桃源郷への憧れが異次元指向となつて現れて
いるのだとも思います。と同時にではこのような不
合理と不正義に充ちたこの世とは何なのか、そこに
産み落とされた自分とは、畢竟人間とは何なのかと
いう、先の「純文学」に通じるところの文学の系譜
が鮮やかに継承されていると見ます。幸いなのだ
うか知りませんが靈とか異次元世界とかは今の若者
たちに於いては謂わば規定事実化していて、我々世
代のあの世の存在への懷疑や、それからする無神論
の類はむしろ少数派であるようです。

そこで、結論的に云いたいことはこれも先の「時
代の目」に絡めて云いたいことで、この両輪、社会
の進捗と個人・文学の進捗は車軸によって結合され
ねばならないのだと思います。片輪だけでは危なっ
かしいし曲芸にはなるかも知れませんが泰然・自然
とはなり得ません。では車軸で結ばれるとはどうい
うことか：ですが、ここに於て彼ランボーが遂に見
出し得なかつたこと、すなわち彼があれほど憧れた
魂というものが、実は他(他人)との関わりに於て
こそ、その真の姿をいかに湧現し、自分に知ら

しめ得るものだとすることに繋がって来るのです。
他との連携に立つ時、今度はそれが自分一人の深化
にも必ず繋がってまいりますから、これをして両輪
を車軸で繋ぐ、結ばれるという次第。ではそう云う
論拠を示せとなるのが理ですが、残念ながら私は未
だ未熟者の極みでなかなか論証が叶いません。何せ
時代の目は「次元を超えよ」と先覚者指向者たちに
促している最中でして、私はその範疇に属し得ない
のもこれも自明の理、理なのですから。しかしとは
云つても(得意の?)「感覚」に於いてはこうも云
えましようか。

故手塚治虫先生の作品「火の鳥」の中で熱核戦争
の果てに滅び去つた世界にただ一人生き残つた主人
公マサトが、「こんな世界は嫌だ。無意味だ。ああ、
神よ、例えばぼくは滅んでも、どうか今一度生命を：
他の人たちを：」と願つては涙を眼前の放射能で汚
染された湖面にしたたり落とし、すると生じた波紋
がみるみるうちに生命の輪となつて広がり、一瞬の
うちに生命に充たされた世界を再現する：というシ
ーンがありました。あたかも宇宙のビックバンを思

わされるような最終場面でしたが、実はこれに関連してある正覚者の言葉で「（たとえこの世が減んでも）人間一人があれば宇宙は創造される」というものと「神がどれほどあなたがた一人一人（人間）を愛しているか…もしそれを知ることが出来たら、驚きのあまり死んでしまうほどですよ」というものがあります。この死んでしまうような驚きの感覚を奇跡的に実感し得たのが先の臨死体験者たちの述懐なのでしょう。真の人間一個の自覚に立ち得た「俺一人が、俺一人だけが人間やねん、廻りの世界は皆ウソやねん」と、その働きまでに立ち得た「大事だったこの世のことなど消し飛んでしまい、今のこの感覚こそがすべて」ではないのかと思います。

さて、この辺りが先学の伊藤氏の論から類考して綴った拙い私の文学論（？）なのですが、しかしこれでは未だ（先の両輪ではありませんが）片手落ちです。「廻りはウソやねん」というそのウソなるものの実態を、ランポーが忌み嫌った世の虚飾や権力層の実態を、それに抗うその必要性を、また異世界に逃げてそこに住む、あるいは憧れる（ならいいで

すがどうかするとそこからの現世へのリベンジを図る）若者たちの誤った指向性を、これらを論じつつ、その発生理由まで推考せねばなりません。でなければせっかく結ばれた車軸は壊されてしまうからです。今はそれを「カインの末裔」あたりを論拠にして綴り行こうかと考えています（続く）。



【「宝石の覆されたような」朝、新生の街角を（仲間と共に）歩いて行こう…】